

松下村塾記

(丙辰幽室文稿) 安政三年九月四日 二十七歳

長門の国為る山陽の西陲に僻在りす而して萩城は連山の陰を蔽ひ、渤海の衝に
当たる。其地海に背き山に面い、卑湿隠暗なり。吉見氏の、故虚にして古は甚
しく顕ならず。二百年來乃ち本藩の治る所と為る。是において山産海物四方
幅湊し、巖然として一都会を為す。城の東郊、すなわち吾が松下の邑たる、南
に大川を帶ぶ。川の源、溪間数十里、人能く窮むるなし。蓋し平氏遺民の嘗て隠匿
せし所なり。その東北二山、大なるは唐人山と為す。朝鮮俘虜の鈎陶する所な
り。小なるは長添山と為す。松倉伊賀の廢址なり。伊賀は嘗て大内氏の將岩成
豊後と数陣原に戦い、連に敗れるところとなり、遂に大將淵に投じて死す。
原と淵とは今皆存すと云う。山川の間人戸一千、土農在り工商在り。昔時は分
不平の氣、今は則ち鬱然靄然、発して人物を為し、煥乎として一勝区を為す。
然るに吾常に怪しむ。昔時は分惋の氣、流れて川と為り、峙て山と為り、発す
れば則ち人物と為り、以て謂うところ一勝区を成すを。固よりそれ常のみ、苟く
も奇傑非常の人起りて奮発震動し、乾を転じ坤を憾かし、以て邦家の休美を成す
に非ざるよりは、將た何を以てか山川の氣を一変して、其の忿惋を平かにする
に足らんや。況んや萩城に隠暗にして顕はれざること、亦已に久しきをや。今
は則ち巖然として一都会たれども、是れ猶ほ真に顕はるる者に非ず、特だ其の
機の先兆のみ。今松下は城の東方にあり。東方を震と為す。震は万物の出ずる

所、又奮發震動の象あり。故に吾謂へらく、萩城の將に大いに頭はれんとするや、其れ必ず松下の邑より始まらんかと。

去年余獄を免され、松下に家居し、外人に接せず。独り外叔久保先生及び諸従兄弟、時々過訪し、因つて共に道芸を講究す。家嚴家叔と家兄と、又従つて之れを奨励せらる。吾が族の盛大なる、蓋し將に往々一邑を奮發震動せんとするなり。

初め家叔先生の徒を集めて教授せらるや、其の家塾に扁して、松下村塾と曰ふ。家叔已に官となり、其の号久しく廢せり。外叔已にして邑の子弟を会して之れを教へ、其の号を沿用す。頃ろ余に命じて之れを記せしむ。

余曰く、「**学は人たる所以を学ぶなり。**塾係くるに村名を以てす。誠に一邑の人をして、入りては則ち孝悌、出でては則ち忠信ならしめば、則ち村名これに係くも辱ぢず。若し或いは然る能はずんば、亦一邑の辱たらざらんや。抑々人の

最も重しとする所のものは、君臣の義なり。国の最も大なりとする所のものは、華夷の弁なり。今天下は如何なる時ぞや。君臣の義、講ぜざること六百余年、近時に至りて、華夷の弁を合せて又之を失ふ。然り而して天下の人、方且に安然として計を得たりとなす。神州の地に生れ、皇室の恩を蒙り、内は君臣の義を失ひ、外は華夷の弁を遺るれば、則ち学の学たる所以、人の人たる所以、其れ安くに在りや。是れ二先生の痛心せらるる所以にして、而して余の之れが記を為ら

ざるを得ざるも、亦ここにあり。噫、外叔先生、誠に能く一邑の子弟を教誨して、上は君臣の義、華夷の弁を明かにし、下は又孝悌忠信を失はず。然る後奇傑非常の人、起つて之れに従ひ、以て山川忿惋の氣を一変し、邦家休美の盛を馴致せば、則ち萩城の真に顕はること、將にここに於いてか在らんとす、豈に特に一勝区一都会のみならんや。果たして然らば、則ち長門は僻して西陲に在りと雖も、其の天下を奮発して、四夷を震動するも、亦未だ量るべからざるのみ。

余は罪囚の余、言ふに足る者なし。然れども幸に族人の末に居れり。其の、子弟を糾輯して、以て二先生の後を継ぐがごとくんば、即ち敢へて勉めずんばあらざるなり。」と。外叔先生曰く、「子の言は則ち大なり、吾れ敢へてせざるなり。請ふ邑人に切なるものを聞かん」と。余曰く、「古人月旦の評あり。今且く子弟の爲めに三等を設立し、分つて六科と爲し、各々其の居る所を標し、月朔に昇降して以て其の勤惰を験せん。曰く進徳、曰く専心、是れを上等と爲す。曰く精勵、曰く修行、是れを中等と爲す。曰く怠惰、曰く放縱、是れを下等と爲す。三等六科、志の趨く所、心の安んずる所、爲して可ならざるなし。誠に邑人をして皆進みて上等の選たらしめば、則ち吾れの前言未だ必ずしも其の大を憂へざるなり」と。先生曰く、「善し」と。因つて併せ記す。安政三年丙辰九月、

吉田矩方選す。

『松下村塾記』概略要旨

長門の国は僻地であり、山陽の西端に位置している。そこに置く萩城の東郊にわが松本村はある。人口約一千、士農工商各階級の者が生活している。萩城下は既に一つの都会をなしているが、そこからは秀れた人物が久しく顕われていない。しかし、萩城もこのままであるはずがなく、将来大いに顕現するとすれば、それは東の郊外たる松本村から始まるであろう。私は去年獄を出て、この村の自宅に謹慎していたが、父や兄、また叔父などのすすめにより、一族これに参集して学問の講究に努め、松本村を奮発震動させる中核的な役割を果たそうとしているのである。

叔父玉木文之進の起こした家塾は『松下村塾』の扁額を掲げた。外叔久保五郎左衛門もそれを継いで、村名に因むこの称を用い、村内の子弟教育にあたっている。その理念は「華夷の弁」を明らかにすることであり、奇傑の人物は、必ずここから輩出するであろう。ここにおいて彼等が毛利の伝統的価値を発揮することに貢献し、西端の僻地たる長門国が天下を奮発震動させる根拠地となる日を期して待つべきである。私は罪囚の余にある者だが、幸い玉木、久保両先生の後を継ぎ、子弟の教育に当たらせてもらえるなら、敢えてその目的遂行に献身的努力を払いたいと思う。

『吉田松陰』 古川薫著 創元社より

解説

「松下村塾記」は、当時松下村塾の名で以て私塾を経営していた外叔久保五郎左衛門の求めに応じて松陰が書き贈ったものである。それは村の名前を冠した塾の教育の理想とその責務の大きさが述べられており、その抱負はまことに大きい。文章もまた雄渾で口誦して士氣の高まりを覚えるものがある。松陰自ら、「略ぼ志す所を言ふ」（小田村伊之助宛書簡、安政三年十一月二十日）と述べており、自信の作であると言えよう。

ここで松陰は、教育の使命を、君臣の義をわきまえ、「華夷の弁」を明らかにした「奇傑非常」の人を育成するところに置いている。この考え方は後に自ら主宰者となった松下村塾においてはもとより、彼の終生変わらぬ教育観であった。なお本文については、それが自然の形勢からある種の哲学的見解をさぐり出している考え方は東洋的であるという指摘もある。（玖村敏雄）

（『吉田松陰撰集』（財）松風会刊行より）

用語解説

長門長門||長州(山口県)

僻へき||片寄かたすみっていて遠へんい。辺へんび。

西せい阪い||西方かたすみの片隅

渤海ぼっかいの衝しょう||渤海は中国の遼東半島りょうとうはんとうと山東半島さんとうにかこまれる黄海の湾入部分の名称。

衝しょうとは突き当たり。萩城はぎじょうが北方に対する要衝ようしょうの地の意。

卑湿ひしつ隠暗いんあん||萩は低湿ていしつで山陰やまかげにあつてくもりがちである。

吉見よしみ氏の故墟こきよ||石見いわみの国(島根県)吉見氏は津和野つわのの豪族。吉見正頼よしみまさよりの時に萩に居館きよかんを

構いんせいえ隠棲いんせいしたその跡地あとち。二百年来ていもむと||毛利輝元てるもとが慶長九年(一六〇四)萩城を築いてか

ら、約二百年が経たっている。本藩ほんはんの治所ちしよ||毛利藩の政府の所在地。

輻湊ふくそう||物が一ヶ所に集中し、混み合うさま。松下邑まつもとむら||萩城下の東郊とうこうに位置する村で松本

村の雅称がしやう。松陰生誕の地。川の源みなもとは溪澗けいかん数十里||阿武川あぶがわの源は溪谷けいこくを数十里さかのぼつ

た所にある。

平氏の遺民いみん嘗かつて隠匿いんとくせし所||その昔、源平の合戦で敗れた平氏の落人おちうどが隠れ住かくんだ所。

唐人山とうじんやま||現在の萩市椿東ちんとうにある標高四七四メートルの山。朝鮮俘虜ふりよの均陶きんとうする所||朝鮮

の役えき(文禄ぶんろく、慶長けいちょうの役えき)で捕虜ほりよとして連行された朝鮮の陶工とうこう達が、藩主御用の陶器きんを謹

製せいした所。萩焼はぎしやうき発祥はつしやうの地。

長添山ながそえやま||萩の北東、現在の椿東にある丘陵きやうりやう。松倉伊賀まつくらいの古城こじやうと言いい伝つたえられる山は、

それより数百メートル南東の城じやうの腰山こしやまで、松陰の誤り。松倉伊賀まつくらいの廢址はいし||肥前(佐賀

県) 島原藩主であつた松倉重政の城跡。 陣原||地名。今の萩市の沖原にあたる。

大将淵||松倉伊賀が没したとする所。場所は不明。忿惋||いきどおり、恨むこと。

鬱然靄然として、発して人物となり||物事の勢いが勢んで(鬱然)なごやかさに満ち

た(靄然) 雰囲気があり、そうした中で優秀な人材を生み出している。

煥乎||光輝いているさま。 勝区||立派で勝れた場所。 奇傑非常の人||人並み以上に

優れた人物。 奮発震動||ふるい動かす。 乾を転じ坤を憾かし||乾は天、坤は地を示

す。天地を動かすこと。 邦家の休美を成す||我が長州藩を美しく立派なものにする。

儼然||おごそかで侵しがたいさま。 先兆||前ぶれ、予告。

震||易占いの八卦の一つで、雷、東、長男等を表す。易経の説卦伝に「万物は震に出づ、

震は東方なり」とある。 象||揺れ動くしるし。 去年||ここでは安政二年

十二月十五日、出獄(野山獄)して蟄居した。 外人||家族以外のよその人。

外叔久保先生||母方の叔父、久保五郎左衛門。 養母久満(吉田大助の妻)が家格の関

係から五郎左衛門の養女として吉田家に嫁したので外叔という。 道芸||道德と学芸。

家敵||父、杉百合之助。 家叔||玉木文之進 家兄||兄、杉梅太郎

扁して||戸口に標札をかかげる。 沿用||松下村塾名をそのまま用いること。

誠に一邑の人をして... 村名これに係くるも辱ぢず||実際、この松本の一村の人々に、

家にあつては父母に孝を尽くし年長者によく仕え、また外においては主君に忠義を尽く

し他人に信義を尽くさせるならば、塾名に村名を掲げてもその名に恥じることはない。

君臣の義しんか || 君主と臣下の間で守るべき正しい道。

華夷かいの弁べん || 華夷とは中国人がじこくちゅうか自国(中華)と外国(夷狄いてき)のことを区別して呼んだ名称。
弁とは差異さいを明確にすること。ここでは日本と外国の違いを明確にすること。

六百余年よねん || 鎌倉幕府が開かれ(一一九二)、武士の支配する世の中になって、およそ六百年を経へる。

方且まさに安然あんぜんとして計を得たりと為す || 今やきちんとした計画が出来ていると満足して
いる。
神州しんしゅう || 神国日本。
二先生 || 玉木文之進と久保五郎差衛門。

教誨きょうかい || 教さとしえ諭すこと。
馴致じゆんち || 次第に別の状態に移り変わらせること。

四夷しいうい || 四方の異民族。
東夷とうい・西戎せいじゆう・南蛮なんぼん・北狄ほくてき。
族人 || 一族の者。

糾輯きゆうしゅう || 集めること。

敢あえて勉つとめずんばあらざるなり || すすんで努力しなければならぬ。

月旦げつたんの評 || 月の第一目に人物を評価する。中国の後漢時代ごかんに、許劭きよしょうが毎月の初めに郷里きょうりの人物を評しあつた故事こじによる。

月朔げつさくに昇降しょうかうして || 毎月の第一目に、人物評じんぶつひようの等級の上げ下げをする。

その勤惰きんだを験けんせん || 子弟が勤勉か怠惰たいだかを調べよう。

三等六科さんとうろくか || 『上等』 ↓ 進徳しんとく、専心せんしん。 『中等』 ↓ 精励せいれい、修行しゆぎよう。 『下等』 ↓ 怠惰たいだ、放縱ほうしゆう

吉田松陰の名文・手紙を読む【目次】[ページへ戻る](#)

[吉田松陰.com トップページへ](http://yoshida-matsuoka.com/top/page/)